

令和4年度

益田市総合教育会議会議録

日 時 令和5年2月16日（木）15：00～

場 所 益田市役所 第2会議室

益田市教育委員会

益田市総合教育会議会議録

開催年月日 令和5年2月16日（木）15時00分～

開催場所 益田市役所 第2会議室

日 程

- 1 市長あいさつ
- 2 益田市型中高一貫教育について
 - ①これまでの取り組み
 - ②これからの展開について
- 3 その他
 - ①ライフキャリア教育について
 - ②その他

出席者

総合教育会議

益 田 市 長	山 本 浩 章
教 育 長	高 市 和 則
教 育 委 員	梅 津 富美子
教 育 委 員	大 庭 隆 志
教 育 委 員	齋 藤 哲 瑯
教 育 委 員	原 田 笑

事務局職員

教 育 部 長	長 嶺 勝 良
教 育 総 務 課 長	志田原 渉
学 校 教 育 課 長	田 原 正 紀
学 校 教 育 課 参 事	松 元 善 生
協働のひとづくり推進課主査	中 島 光太郎
協働のひとづくり推進課派遣社会教育主事	桐 雅 幸

志田原課長 ただいまより令和4年度益田市総合教育会議を開催したいと思えます。この会議は原則公開としておりますが、本日傍聴希望がございませんでしたのを報告します。

それでは、この会議の開会に先立ちまして、山本市長よりご挨拶申し上げます。

山本市長 皆さん、こんにちは。

本日は、年度末が迫っている大変お忙しい中、総合教育会議にご出席いただきましてありがとうございます。日頃から益田市の教育行政に対しましてご理解、ご協力をいただいておりますことに改めて感謝をいたします。

さて、この総合教育会議の開催は大変久しぶりでございますけども、ご案内のとおり、地方公共団体の首長と教育委員会が教育政策について協議、調整する重要な場でございます。日頃なかなかこうした会議で意思疎通を図ることは難しいところでございますけども、本日の機会にぜひ忌憚のないご意見、もしくは意見交換ができればと思っております。

本日の議題といたしましては、特に益田市型中高一貫教育についてのこれまでの取組、そして今後の展開について意見交換をできればと思っております。

それでは、本日はどうぞよろしくお願いいたします。

志田原課長 それでは、これより長嶺教育部長が進行いたします。

長嶺部長 進行は市長がされるということなので、私から全体のお話を本日の総合教育会議の意味合いというものをご説明させていただこうと思えます。

総合教育会議、先ほど市長が申しましたように、首長と教育委員の皆さんいろんな議論をしていただくということではありますが、特に益田市におきましてはこの間ずっと重点課題として取り組んでいるのが益田市型の中高一貫教育というものです。この部分について、令和2年度は何度となく開催をさせていただいて、令和4年度、今

一定の事業に取り組んでいるという形です。令和5年度に向けてまた新たにというところの事業計画を予定にしているということです。ここは市長の思い、それから教育委員会の皆さんの思いという部分の意思統一をさせていただいて、いろんな意見を踏まえながら、新年度の事業展開をしていきたいと考えておりますので、そういったところを中心に議論していただけたらと思っております。それでは、よろしくお願いいたします。

山本市長 それでは、進行のほうを私が務めることになっております。どうぞよろしくお願いいたします。

では、益田市型中高一貫教育について、①のこれまでの取組と、②のこれからの展開について、一緒に一括して事務局のほうから説明をお願いして、その後皆様と意見交換をしたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

では、事務局から説明をお願いします。

松元参事 それでは、よろしくお願いいたします。学校教育課参事、松元です。よろしくお願いいたします。

まず、委員におかれましては、カラー印刷の益田市型中高一貫教育の推進をご覧くださいませでしょうか。よろしいでしょうか。

では、説明させていただきます。これは、益田市型中高一貫教育の推進というものを掲げております。このあたり、益田市型中高一貫教育の取組につきましては、本格的には令和3年度より始めているところです。益田市はご存じのとおり、ひとが育ち、輝くまち益田と掲げております。このようなまちを目指して、中高一貫教育を目指しているというところであります。

図の説明を簡単に申し上げます。下面、下のほうをご覧くださいればと思うのですが、益田市は下が保幼こ小、保育所、幼稚園、認定こども園など、幼・保と呼ばせていただきますけれども、それから小学校、中学校、高等学校というそれぞれの段階においてまず3つの柱に取り組んでおるところです。その中軸といいますのが、図

の真ん中にあります確かな学力の育成です。学力というものは、ご存じのとおり、大変重要な基盤となるものですので、そういったものを踏まえて卒後の進路保障ということで、卒後の選択肢を増やすということで、その中でも、これからまた出てきますように、理数教育の充実というものを掲げていくものです。

そして、その左側に参りますと、ふるさと教育というものを掲げております。ふるさと教育は、島根県教育委員会が平成17年から掲げているもので、島根県の全ての小・中学校において行われているものです。ふるさと教育につきましては、例えば地域の自然、歴史、文化、伝統行事など、いわゆる教育資源と呼んでおりますけども、「ひと、もの、こと」というのを生かしながら、学校と家庭、地域が一体となってふるさとに誇りを持ち、心豊かでたくましい子供を育むということを掲げまして取り組んでいるところです。

そしてさらに、その一番右側になります。益田市としてはライフキャリア教育というのを掲げております。ライフキャリア教育につきましては、今後いろんな変化に富んだ人生といいますか、時代になります。そういった時代について、自分の人生というものを能動的に生きていくということが必要になります。そういった力を育むのがライフキャリア教育ということで掲げているところです。具体的な事案としましては、例えばよくご存じのように、益田版カタリ場というものを実施しながら、自分の人生設計、今後の在り方、キャリア形成について考える場を設けるところです。

そういったそれぞれの3つのものをつなぐものといいますのが、その真ん中の黄色で掲げさせていただいた多様の学びの場であったり、今回の指導要領の目玉でもあります主体的・対話的で深い学びを実現するということ、それから社会に開かれた教育課程ということで、学校の教室、学校の中だけで学びを完結していたものというものを、例えば地域の課題、学校外の課題というものを見つけながら、それに積極的に関わっていきながら解決方法を考えたり、実

際に関わりながら地域の方と協力して取り組むということを含めて、社会にその内容を開いていこうというところで、社会に開かれた教育課程というのを実施しているところです。それを、この図で言いますと、左側、学校教育、それから右側、社会教育、両面で支えていくということになります。

そして、益田市型中高一貫教育といいますのは、それは取組の中でも、その上段になりますけども、中学校、それから高等学校という6年間というものを一貫した流れで行う、これを益田市型中高一貫教育というところで捉えているところです。また、後ほど事業の中で出てくると思いますが、そういった取組を通して、その図の上にありますような高等教育機関への進学、市内企業、県内企業などへの就労というところで、就職も地元の益田市に、また島根県へ帰ってきてもらうということも含めて一貫した流れをつくっていきたいというところを取組に掲げているところです。理念につきましては以上となりますが、具体的な取組について、田原課長から説明させていただきます。よろしくお願いします。

田原課長

ここからは私のほうから説明させていただきます。学校教育課の田原でございます。

資料といたしましては、益田市型中高一貫教育の推進を指してというタイトルの資料と、具体の事業につきましては、その次の令和4年度事業実施状況等という表にしたもの、この2つを使って、まずはこれまでの取組についてということでご説明したいと思えます。

令和4年度につきましては、益田市型中高一貫教育を推進していくために、大きくは2つの事業に取り組んでいます。1つは市内高校連携推進事業というもの、それからもう一つは理数系人材育成協働事業ということで、それから大きく2つの事業に取り組んでいます。

あと、この資料にあります事業費につきましては、あくまでも予

算ベースの金額だということでご理解いただければと思います。

まず、市内高校連携推進事業についてですけれども、市内に高校は4校ございます。それぞれの4校と連携して様々な取組を行っているところでございますけれども、まず左上の益田高校については、高度理数系の人材を育成するということで本年度取り組んでいます。具体につきましては、もう一枚の紙の事業実施状況等のNo.1番が関連する事業でして、益高の学び体験ということで、内容といたしましては、市内の中学3年生を対象にして、確かな学力を育成するということで、理科と数学と英語の3教科、60分、13講座ということで、益田高校の先生やそれから外部講師も招いたりして実施をしているところでございます。

続いて、益田翔陽高校についてですけれども、こちらについては市内の産業界との接続をとということで様々な取組を行っています。事業実施状況で言いますと、No.2番、3番、4番、5番、これが翔陽高校で取り組まれている事業になります。概略ですけれども、事業番号2番につきましては、田んぼの水位センサーを作成するということで、農家が抱えている課題の一つとして水田の水位と水温と気温というのを可視化したいということで、その手法について電子機械科の技術を使ってセンサーを作ることで可視化をすることに成功したということで取組を行っています。

続いて、事業No.3番については、学校給食の地産地消ということで、市内の小・中学校を対象に、もともと翔陽高校で栽培されておりました美味しまねゴールド認証米というお米ですけれども、これの栽培に小・中学生が関わって、自ら田植から稲刈りまで収穫したものを給食で食べるということで、これを通じて小・中学生に食育という部分を伝えていこうということと、高校生にとっては、これらのことを小・中学生に教えていくということで、自らの学びも深めていくという、そういう効果を期待しているところでございます。

続いて、事業No.の4番、農業土木魅力発信ということでございます

けども、なかなか今農業土木の人材が不足しているという状況もありまして、中学生を対象に翔陽高校で農業土木に関する座学や、それから具体的な作業の体験、並びに現地による実践ということで、高校生の企画、指導によって実施をしているところでございます。具体的な実践内容としては、水田の水路、老朽化して水漏れがするのですが、そういった水路の補修を実際に現地に行って座学と体験で学んだ技術、ノウハウを使って、その老朽化した水路を改修していくといったことを行っています。

そして、事業No.の5番ですが、農業の魅力発信ということでございます。その中で、特にミラツクフェスという格好で市内の農業士と呼ばれる農家さんがいらっしゃいます。市内の中でも先進的に農業に関わっていらっしゃる方々ですが、その方と中高生とで対話、交流することで農業の魅力を発信して、小・中学生の皆さんにも農業に関する興味を深めていただくということで取り組んでいるというところでございます。

続いて、益田東高校についてですが、東高校につきましては課題探究ということで、本年度は事業実施番号でいきますと6番、今世界的にも注目が高まっていますeスポーツという分野について新たに部活動として設立して、なおかつ市内の小・中学生を対象にeスポーツの大会というような格好で開催実施をされています。結構な人数の小・中学生が参加されたと伺っておりますが、こうして今新しい分野として注目を浴びていますけども、そういった活動を通じて東高校としては魅力を感じてもらうということで今取組をされているところでございます。

そして、明誠高校につきましては、同じように高校の魅力化ということでございますけども、事業番号では7番になります。益田市の和食と文化を記憶する冊子の作成ということで、益田市内にありますが食材等々を使った加工品であったり、料理だったりということで、それを冊子にまとめることで地域の魅力をもっと発信しようと

ということで取り組まれております。明誠高校さん、東高もですけども、県外からの学生も多数いらっしゃいます。そういった県外から来られている学生さんに、この活動を通じて益田の魅力というのをしっかりと学んでもらおうという、そういう意味合いも込めてこの活動に取り組まれているところでございます。

そして、真ん中ですけども、中高一貫推進・4高連携魅力化発信ということでございます。事業番号でいきますと、8番になります。こちらの事業については、益田市未来の担い手育成コンソーシアムに事業を依頼しまして、そこで実施をされているものでございます。大きくは2つありますけども、1つは、4つの高校の魅力を発信しようということで、益田未来協働フェスタ2022というものを7月に開催をしております。内容といたしましては、それぞれ4高で活動されていらっしゃいます特色ある取組をブースの中で小・中学生に体験してもらおうというものや、サイエンスショーや科学チャレンジといったような内容で実施をしているところでございます。参加者が約1,000名程度ということで、中学生の参加が少ないというのは課題してはあるようですけども、多くの小・中学生に体験をしてもらっているところでございます。

あと、もう一点は、確かな学力の育成ということで、主には理科や科学の体験、実験を通じてその楽しさを感じてもらおうということで取組をされているところでございます。

参加された小・中学生のアンケートの集約については、今集約中ということで、成果としては記載してないですけども、そういったことで参加された小・中学生の感想なんかも集約して、今後の取組なんかに反映させていきたいという考えでいらっしゃいます。

そして続いてですけども、下段のほうの理数系人材育成協働事業について、まず島根大学との連携ということで、理系人材育成島根大学協働事業です。算数、数学のパワーアップ教室ということで、算数、数学への興味、関心を促していこうということで取り組んで

います。事業番号では9番ということで、既に夏休みと冬休み、今2回実施しております。そして今年度は春休みにもう一回実施をする計画でいるところでございます。内容といたしましては、島根大学の学生さん、それから松江高専の学生さんに益田に来ていただきまして、小・中学生を対象に、学生自身に授業を考えてもらい、あるいはプログラミング学習、そしてそれぞれの子供さんが持っている課題なんかの自学といった形で、それを通して算数、数学をより一層好きになっていただこうということで取り組んでおります。一応参加された子供さんの感想としては、算数、数学が好きになったという肯定的な回答が90%を超えるということで、事業目的の成果というのは一定程度出ているのかなというふうに思っているところでございます。

続いて、松江工業高等専門学校との連携ですけれども、産業人材育成推進松江高専協働事業ということで、理科実験等を通じて将来の産業人材を育成していこうということで取り組んでいます。事業番号は10番と11番です。内容といたしましては、まず10番ですけれども、工作教室ということで、今年度は夏、秋、冬ということで3回に分けて実施をしております。松江高専によります工作教室を市内で開催をして、多くの小・中学生に参加をいただいているところです。工作で取り上げた内容といたしましては、例えば水陸両用車を作るであるとか、あとは橋梁の模型を作って橋の強度を実験といいたいでしょうか、試してみるというようなことなどなど、様々なテーマで工作教室を実施しているところでございます。

そして、11番については、高専の見学会ということで、保護者も含めて、今高専でどういったことをやっているのかという内容について知ってもらおうということで、益田から松江に行って実際に授業といいたいでしょうか、その教室に参加をしてきたところでございます。

簡単な概略ですけれども、今年度の事業についてはそのような今状

況にございます。

続いて、これからの展開についてということでございますけども、資料については、もう一枚あります。益田市型中高一貫教育に係る取組についてということでございますけども、大きく3つ、これから来年度事業として実施していきたいというふうに考えております。上段の市内高校連携推進事業、それから真ん中の理数系人材育成協働事業につきましては、今年度に引き続いての継続事業ということにしております。先ほどご説明した内容の継続やさらに発展させて進化をさせるといった内容で来年度も継続して事業実施をしていきたいというふうに考えております。

加えてですけども、来年度の新規事業といたしまして、表の一番下段になりますが、中高連携学力育成推進事業ということで、来年度新たに新規事業として実施をしていきたいというふうに考えているところでございます。内容といたしましては、どうしても小・中学生の学力というのは、高校から見ても高校に入学される子供さんの学力というのは当然高校側も非常に興味を持っているというか、関心が高いところでございます。そういう意味では、小・中学生のうちにいかに学力をつけていくかというところも、当然高校側も影響があるというか、興味があるというところですので、ぜひその部分について高校と連携させていただいて、ぜひ市内の小・中学生の学力育成をさらに進めていきたいということで、来年度新たに取組んでいきたいというふうに思っています。具体的内容については、イメージとしては、平日の夜間、あとは土日といった休日、そういった時間を活用して学力育成に向けた取組ができないかなということを考えているところでございます。

非常に簡単ですけども、以上説明とさせていただきます。

山本市長

ちょっと補足しますと、益田市型中高一貫教育というのは、幾つかの要素を含む多義的なものというか、単一のものではなくて、幾つかの要素をまとめたものの総称ということになります。今年度取り

組んできたことは、最初のほうの表にあったとおりですけども、市内高校との連携をする事業、そして県内の高等教育学校と連携して行う事業、大きくはこの2つですし、市内の高校との連携事業については、各校100万円ずつのそれぞれの単独の連携事業と、4校一括で500万円の事業の2つであると。島根大学と松江高専については、それぞれ500万円と100万円の事業ということでやったわけです。令和5年度からは、さらに1つ加えて、中高一貫教育というところから一番連想しやすい益田市の中学校と市内の高校との学力育成のための推進事業をいよいよ始めていこうという考え方です。

それでは、委員の皆様からご質問ですとかご意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

大庭委員

先ほど田原課長さんが説明された中で、令和4年度の事業実施状況について少し感想とか質問をさせてもらいたいなと思っております。

まず、例えば8番、市内高校連携推進事業の内容があるんですけども、その中で市内4高校魅力発信業務という中で、益田未来協働フェスタ2022が開催されましたけども、これについての参加者を見てみますと、総数では約1,000名ということで、内訳でいくと、小学生が276、中学生が12名と。これを見たとき、やはり中学生が少ないと思います。もうちょっと、これは逆ぐらいでむしろあってもいいように思います。ちょっと人数的に少ないと思うので、それが1つ。

それから併せて、その下、②のほうです。②-1ですか、そこに9名とありますけども、これも下段のほうでも参加者人数は少なかったというふうに明記されておりますけども、やはり少ないですね。もう少し中学生に参加してほしいなという気がいたしました。

それから、10番、理数系人材育成協働事業ということで、松江高専の学校が上がっておりますけども、これについて対象者は小・中

学生だと思うのですけども、例えば成果の欄のところを見ますと、小学校低学年から多数申込みがあったと。その後、教室によって参加者は抽選だと。それは定員が15名だから、そこに対して51名の申込みがあったと。何かこれはもったいないなと。せっかく51人もあったのだから、何とかこれが活用できないかなと。これは、本当に15名が活かされて、あとの倍以上がせっかくのいいチャンスなのに、何かお金をどぶに捨てるようなそんな印象を受けました。

また、質問ですけども、これについては中学生の参加は限られているということがありますけども、反省のほうで、一体中学生は何人いたのかなということを知りたいと思いました。

それから、11番、松江高専の見学会がありますよね。どちらかというと、これを見ますと、保護者と小学生のみの参加、これは逆じゃないかなと自分は思うわけです。むしろ中学生とその保護者が直近にすぐもう進路に結びつくわけですから、そっちが参加しなきゃいけないのに、中学生の参加はなかったという、そういった理由は何かということをお聞きしたいなと思いました。本当にもったいない、もったいないという感じがしております。よろしくお願いします。以上です。

山本市長
田原課長

ご感想とご質問をいただきました。いかがでしょうか。

まず、事業の8番の中学生の参加が少ないということで、これは事業を実施したところでの課題としてもそのように認識をしておりますので、来年度につきましてはどうやって中学生の参加を増やしていくかということを意識しながら実施をする必要があると思っていますし、そうするとどうしても開催する日をどうするかということも当然中学校の状況も踏まえて、いつやるかということも必要になってくると思いますが、いずれにいたしましても、おっしゃられるように、中学生の参加が増えるようにということ意識してやっていきたいと思っています。

それから、10番についてなんですけども、15名定員に対して51名ということで、非常にもったいないというところでございますけれども、確かにせつかく100万円の事業として実施するわけですから、当然多くの人に参加いただいてより大きな効果を出す必要があると思っています。会場の広さ等々も関係したのかもしれませんが、これだけのニーズがあるということでございますので、次年度以降については、当然こういった今年度の状況を踏まえて、会場の設定の仕方も含めてより大勢の人の対応ができるように検討して実施をしていきたいなというふうに思います。

あと、11番のところで、参加が全て小学生だったということですが、なぜ中学生がというところの原因については分析ができておりませんで、これにつきましてはまた今後のところでしっかりと検証して次年度の事業に反映させていきたいなというところでございます。

大庭委員 それで、10番のところで、実際に中学生は何人ぐらいの参加があったのでしょうか。

田原課長 すみません。それについては今手元に資料がございませんので、申し訳ないです。

山本市長 大庭委員さん、よろしいでしょうか。

大庭委員 はい。

梅津委員 9番の算数・数学パワーアップ教室の件ですが、島大生とか高専生参加の半数がリピーターということで、とても中身が充実したものであったとうかがえます。リピーターもすばらしいのですが、まだ参加されたことのない学生さんにもぜひ参加していただきたい。この輪を広げていただきたいと思いました。私の友達は、お兄さんのほうが先にそこに加わってとてもよかったからということで、また同じ高専生なのですが、弟さんもこのたび参加されたということでした。そのように、口コミで市全体に輪が広がればすばらしいなと思います。

松元参事

ご意見、ありがとうございます。おっしゃったように、リピーターが今回半数というのは今までなかった現象ですけれども、大事にしていくと同時に、今課長からも話があったように春休みも計画しておりまして、その中でもぜひリピーターの方に参加していただきたいことと併せて、先ほどおっしゃっていただいたように、新規の方に積極的に担っていただきたいというふうにも言っていますので、島根大学と連携して取り組んでいるところです。

教育長にも、参加を断るなという指示もいただいておりますので、参加があれば、一定の定員は掲げておりますけれども、基本的には来られる方にはぜひ全部来ていただきたいという思いで臨みますので、ご指摘のとおり、一人でも多くの方に来ていただけるように努力したいと思います。ありがとうございます。

山本市長

実は、昨日松江に出張しまして。松江高専に伺って、校長先生と副校長先生とお会いしてきました。それから、この算数・数学パワーアップ教室に参加された学生さん5名とお会いした。そのうち2人は、今年5年生ですので、もう卒業されるということで、もう春休みにはリピーターでは来られませんが、あとの3名の方は来られそうな雰囲気でした。3名の方は、出身が島根西部だったり、2人は益田市内だったりということで、参加しやすいというものもあるので、新規も何とか誘っていただきたいということと、募集定員も5名となっておりますので、今の話だと5名以上にいても受け入れたいという考えということですので、さらに拡大するのでないかと思いますし、島大についてもそういう形になろうと思っております。

齋藤委員

ちょっと質問させてください。

来年度の事業で、市内高校連携推進事業、新規になっていますけど、これは今年度あったNo.8と同じ内容ですかということが1つと、それから予算が4校で500万円と今年度はなっていますね。この内容と予算はどうなっているのかを具体的に。新規となっている事業

の具体的な内容を教えていただけますか。違うのか、同じなのか。新規になっているから、大分内容が変わっているのではないかなと思うのですが、そこはどうでしょう。

田原課長 来年度の新規事業につきましては、先ほど委員さんが言われた8番の事業とはまた違います。内容としましては、市内の高校がどこかというのはちょっと置いておきまして、市内の高校と連携をしてということで、中学生、小学生の学力育成の取組に対して、一緒にやっていただけたところをこれから模索して実施をしたいということでございます。

内容、イメージとしては、例えば夏休み、冬休みの小・中学生のそれぞれ個人が抱えている課題なんかを解決するような場だとか、それから平日の夜間それから土曜日、日曜日といった休日を活用して、学力育成に向けた授業といいましょうか、教室みたいなイメージでありますが、それを高校主体で実施をしてもらいたいということで今考えているところでございます。

齋藤委員 実は、私も、今回の総合会議に当たって、今までやってきた調査とそれからちょっと古いのですが、益田の調査を平成17年に小学校5年と中学校2年生にやっているのですが、そのデータとそれから関東で同じような内容の調査をやっておりますのでここで参考までに申し上げてよろしいでしょうか。

山本市長 お願いします。

齋藤委員 学力の底上げを考えるというのがとても大事なものは、今の子供たちは学校楽しくないって答えるのですよ。楽しくない理由の中に、授業が分からないと。そうすると、底上げをしようとしてこういうところに参加してくる子供たちを一生懸命やっても、学校に行きたくない、先生も相談に乗ってくれない、それから授業が分からない、先生に何を望むかという、もっと授業を分かるようにしてほしいというのがあるんです。その子供たちをある程度フォーカスするのに、底上げをどうするかっていうのもちょっと中期的な計画を持

ってやらないと、この部分だけで一生懸命やったとしても多分上がってこないと思う。昨年度の全国教育調査を見ても、島根県益田市はなかなか平均値に行っていないという実態がありますので、それでちょっと古いデータで益田の平成17年にやったデータですけども、授業に対する満足度が小学5年生で満足できないというのが27.8%、約3割、中学生で何と35%いるんです。これを千葉県でやったら、中学校、小学校ともほぼ同じです。これは平成22年でやっていますが、ということは、やっぱり3分の1ぐらいの子供たちが、学校は楽しくない、授業は分からない、先生も対応してくれないというのでもう投げ出しているのが一つ大きな理由としてあるんです。もう一つは働きたくない、です、今の子供たちは。これは厚労省がやっている調査がありまして、内閣府もやっているんですけども、私もずっとやってきましたら、働きたくない理由は何かということ、子供でいるほうが楽だからというのが一番多いんです、十数年来やっていますけど。その子供たちに今の体験学習をやって少しということはいいのですが、学校の中が楽しくないものですからやる気が起こってこないんです。人から認められないと。それから、生きがいにつながらない。達成感につながらない。これがあるものですから、何やっても駄目だともう烙印を押されちゃって、活力が出てこないという実態があるものですから、ちょっとデータは古いのですが、益田も多分ほとんど変わらない。そうすると、その子供たちをどうするかということと、もう一つは、先生方の姿勢が物すごく大きいということが分かっているんですね。先生方に相談に行っても、自分でやれと、今、忙しいから対応できないと。かかるとあの先生はもう駄目だとなっていく。学校の先生方と子供たちの信頼関係がうまくできていないというところも問題だと。だから、非常に根が深いと思いますので、少しこの益田型中高一貫教育もそこら辺を詰めて、短期的にはこれでいってもいいかなと思いますけど、中期的な視点で底上げをどうしていったらいいか

という、3割近い子供が救えないというのはとても大きな問題なのかと思いますね。そこら辺は申し上げておきたいなと思います。

教育部長

ちょっとさっきの補足。齋藤委員さんのほうが言われた新しい事業について、今こういう現状ですので、そこまで言えるかというのはあるのですが、ちょっと補足をさせていただきますと、今年度見ていただくと、今年度、中高一貫推進・4校連携で500万円、それぞれの学校へ100万円というような形で、いろんな事業の展開を各学校で先ほど紹介したようにしていただきました。そういう中で、それぞれの高校の先生方が率直に言われるのは、入ってきた子供たちの学力を見ると、うんというのが正直なところです。

そういう中で、この事業を展開していく上で、未来の担い手コンソーシアムというところで、学校の先生方が集まったり関係者が集まったりして協議する場があるのですが、そこでその中の先生方というろいろ話をすると、我々に何かできないだろうかというような話もありました。そういう中で、今後新しい事業という部分でこれは我々教育委員会で先ほど言いました土曜日、日曜日のことだとか、平日の夜のことだとか夏休み、冬休みのことだとか、一応考え方を整理して、これを各学校の方々にもいろんな意見をいただきながら、それなら我々がもっとこういうことをやって、こういうことを受けていきたいなというような提案があれば、そういったことの中で受けていこうというふうに。確かに齋藤委員さんが言われたように、3割の方々の底上げというのは非常に大切なことで、誰一人こぼさないという視点で言うと必要なことなのですが、今ここでやろうとしているのは、大きな中高一貫の柱である卒後の進路の保障ということですかね、合同協議会という部分、特にこの新しい事業というのは、高等教育機関もはっきりと大学の進学という部分をどこの大学でもという話でもないのですが、益田の今全体の学力を見たときに、よし、これだったらそれなりにみんな知っているよな、すごい大学にもちょっと頑張れば行けると、たまに誰かが行くとい

う話ではなくて、一つの選択肢として、よし、ここでもうちょっと自分たちも勉強したらここへ入れるぞというような機会の一つにしていきたい。大きな選択肢の中で、もう極端に言うと、東京大学なんて無理ですよとはなから思うのではなくて、自分たちもちょっと頑張っていくとそういうところへ行けるというような選択肢をつくっていきたいというのが主でこういった形。東京大学が全てとは言いませんが、そういったことも選択肢として考えていくというのが中高一貫教育の基本の土台。大学は東京大学でなくても構いません、就職しても別に構わないのですが、そういったことも選択肢として確立するというのが、今の益田市型の中高一貫教育ですので、そういった中での事業展開という部分です。齋藤委員さんが言われるのは、もっともっと大切な話で、中高一貫にかかわらず、教育委員会として取り組んでいていただくということは十分意識して進めていくべきだろうというふうに思っています。

齋藤委員

それに対して私が心配するのは、学校でリーダーシップを取ってもらって、お願いしますということは担当する先生方は人事異動で代わったり、これは総合的な教育もですけど、最初は文科省がやってくださいとやったのだけでも、負担が増えてくるんですよ、どんどん。そうしたら、先生方は嫌気が差しちゃうんです。せっかくスタートしたけど、途中でドロップアウトしちゃう。これは俺の主義じゃないのだと。本来の先生方の仕事じゃないです、確かにね。それが1つ心配。

それからもう一つ、今大学なんかでもそうなんですけど、ほとんど入れますよ、よっぽどの手ごわい大学でなければ。そこへ向かって突っ走るのかっていう問題なんです。今、専門学校と大学と短大を含めると大体60%以上が進学しています。問題は、大学に入ったけれどというような問題が次に起こってくるので、行政としては力を入れるほうがいいのだけれども、それが子供たちの自信につながって、社会参画に大きな力を発揮してくれるかという問題とある程

度つながっていくような形にしていけないと、さあ、大学に入りました、そこでおしまいってというのが一般的な今の教育の現状ですからね。そこも少し視野に入れてもらいながら、もう一つは先ほど申し上げた学力のボトムアップを図っていくということになると、これとの関係性はどうなるのだろうかという問題です。そういうことも総合的に少し考えていく必要があるのではないかなと。

それから、私も今日お邪魔することで昨日からずっと考えてきたのは、土曜日、日曜日、祝日あたりに高校生たちに自主的に行ってもらって、そしてそこで子供たちに教えてもらうスタイルを取るべきだろうと、日常的に。教育というのは——教育という言い方はおかしいですけど時間がかかりますから、やはり理解してもらうのにね。だから、短期的に二、三回ってということじゃなくて、ふだんの日常生活の中で取り入れられるような、場合によっては土日だったり、長期の休みであったり、地元の方々のところにホームステイで受け入れてもらって、そこで寝泊まりしながらよその家庭の事情も知ってもらうという機会もつくれるし、農家であれば子供たちと一緒に大人がちょっと野菜を作ってみたりとかってということも含めて、少し工夫が必要ではないのかなという感じで申し上げております。

松元参事

先ほど長嶺部長が答弁されたことも踏まえてなのですが、そういう益田市の中高一貫を進めると同時に、先ほどのご質問の一部ではありますけども、学校が楽しいかどうかということについては、この中高一貫にかかわらず大事なことだと考えております。全国学力・学習状況調査を見たときにも、やはりこの前に比べて全般的に落ち込んでいる数字が出ています。この近々で言いますと、令和4年の小6、中3の全国学力・学習状況調査を見ても、益田市の子供たち、小6と中3の「楽しい」と答えた子供は約79%でした。これは、去年の数字よりは上がっておりますけども、これは県平均から比べても大体3から6ポイント低いという結果が出ています。

ですから、学校は楽しいと思ってもらえる基盤をつくりつつ、学校生活を楽しんでもらうというのは当然重要になるというのは認識しているところです。

併せまして、先ほどご指摘のあった授業が分からないという内容というところについても、やはり以前の報告と重なりますが、県北に行くとパーセンテージが低く出ておりますので、例えば国語、算数、数学、理科というものを見たときも「よく分かる」と答えた小6は78%で県、国では84%ということで、6ポイント下がるということも含めて、その要因というのは、中高一貫にかかわらず、基盤として育てなければいけないものとしてやっていかないとという認識は持っております。

山本市長

新規の事業である中高連携学力育成推進事業の考え方として、もう今例えば高校などの高等教育機関への進学率は60%ぐらいという話がありましたけども、ここに入る人を増やすと目的よりは、その中の大学であり、また大学の中でもよりその後の大学卒業後の進路が広がるような大学への進学率を今より増やすという考え方だと思います。ですので、齋藤委員さんが言われたもう一つの問題意識であるところの学校が楽しくないとか、授業に満足してないとかという層、これはこれでももちろん取り組みが必要なのですが、それとはまた別の層を拡大していきたいという考え方をご理解いただきたいと思います。

原田委員

何点かお伺いさせていただきたいのですけれども、最初の中高一貫教育の推進を目指しての資料の3枚目のところの中の1番目の真ん中にある中高一貫推進の高校連携魅力化発信業務委託の②番のところなのですが、4高校の活動を小・中学生に発信するための経費。発信して内容を理解してもらおう小・中学生にというところは分かるのですけれども、その先、内容を理解してもらった後、どういう目的、ゴールを目指していらっしゃるのかというのを一つ伺えますでしょうか。

田原課長

その目的ですけども、小・中学生に卒業後行く高校が一体どんなことをするのか、そこを早い段階で知っていただくことで、今日の前の授業がありますよね、その辺に対する姿勢も変わってくるのではないかというところを考えています。早く高校のイメージを持ってもらうことで、自ら学習する意欲も増してくるといったことを考えているところでございます。

原田委員

その意味でいきますと、例えば松江高専はかなり学力がないと進学できませんけれども、物づくりの楽しさとか作ることの喜びを知るプラスアルファで、じゃあこの学校に進むためにはこのぐらいの学力が必要で、こんな勉強をしてきたっていうような内容までもし盛り込んでいただければ、より学習意欲のアップにつながるのではないかなというふうに、この資料を拝見して思いました。島根大学についても同じですね。ここでこういう勉強をするためにこの人たちはどれくらい勉強してきて、どのぐらいの数字が必要で、じゃあ今の間にどういう勉強をしておかなきゃいけないのかというちょっと具体的なビジョンまで見えるとより学力アップという目的につながるのではないかなというふうに考えましたし、翔陽高校、東高校さんの取組に関してもそうですけど、学校のほうでこういうことをする、こういうことが学べる、行ってみたい。プラスアルファで、じゃあそのさらに先、もしお米が作れたらどういう役に立てるのか、今身近でこのお米というのがどういうふうに役に立っているのか、自分に当てはめたときにもうちょっと具体的なビジョンが描けるところまで持って行ってあげると、自分が働く喜びとか仕事をする喜び、ここで学ぶ喜びというのまで感じるができるんじゃないかな。楽しいで終わらなくて、次のステップまでもし学ぶことができればいいなと活動内容を見ていて感じました。

具体的な今後の新規事業に関してなんですけれども、高校生と連携して取り組むというところですけど、学校以外で学ぶ場を提供するというのはすごく大事だと思います。ここに行ったら勉強できると

いう場所がさらに増えるということがすごくありがたいなと思いますし、今例えば中学生、高校生が自習をするというときに、どこでしているのだろうと。たまに保健センターEAG Aの中に行くと、休みの日に学校の中学生とかが勉強しているのですが、そういう場所がさらにあればいいなって。ただ、誰かがいなくても、冷暖房が効いていて、ここに自習室として開放されている場所というのは、市内にもうちょっと、マクドナルドで勉強している高校生を見かけるのですが、ではなくて市としてここをどうぞというような場所がもっと増えればそういう意欲のアップにもつながるのではないかなと思います。

私自身が肌で感じる一番の課題は、やはり英語ですね。教科化されて、娘の教科書も見るとですけど、私たちが学んできた時代よりははるかに難しいです。小学生でこんな英語を勉強しないといけないのか。果たして小学生で理解できるんだろうかというレベルの内容です、教科書が。それを英語の教員ではない小学校の先生が今教えないといけないという状況の中で、子供たちが拒否反応を起こしたまま中学校に来て、すごく差が開いているなと感じるんですね。英語が得意な子も拒否反応を示して、中学校になっても英語を受け入れない子だとすると、高校の部分では、もしできるのであれば、英語はやっぱりどこの大学に行くにも必須科目ですし、ここに力を入れてやっていただけるのであればありがたいなと思いますし、そうなったときの課題が益田もあまりにも広域だということで、じゃあこの広域をどういうふうにカバーして、いろんな地域の子に提供するのことも考えていかなければいけないのかなと感じました。

齋藤委員

中高の連携と今島大と高専の連携をやっているわけですが、もううちの大学自体が高校生を対象に授業をやっているんです。つまり大学を理解していただこうと。そのためには、ぜひ学生を入学させてくださいとPRに回るのですが、今度は逆にやっぱり見

てもらわないと説得力がないだろうというので、授業をやって、そうすると僅かですけど、何人かはやっぱり入学してきたりというのがあるんですね。そうしてみると、地元にあるがなかなか高校に見に行けないし、高校へ入れないしということがあるのだとすれば、高校で中学生を対象にして、今の英語でも何でもいいでしょうし、特色のあるところで、例えば授業のチャンスをつくってもらおうというふうなのも一つどうかなという気がしています。

それともう一つ、先ほどの7番のところで食と文化の連携というのがあるんですね。これ実際そうなんですけど、大体学校の中でつくって、学校の中だけで消化しているんですけど、せっかく生徒たちが作った食事をできたら市民の方々に有料でいいと思うので提供してもらえないかと。学校の中でそれだけの何人かを受け入れてもらって、食堂らしきところもあるでしょうから、そこで作ってもらって提供してもらって、そしてそれぞれいろいろ意見をいただいて、ああ、これはおいしかったとか、もう一つこうあってほしいなという、学生と地域をつなぐ一つのチャンスとして、有料でいいでしょうから、そこら辺はできないのかなと。場合によっては、土曜日、日曜日、空いているうちが結構ありますから、そこを借りて土日、祝日に限ってそこを高校生主体のレストランにするとかっていう、少し地域と結ぶ、現実にとにかく食べ物ってとても大事ですし、益田の食っていうのは新鮮でやっぱりおいしいですから、それをうまくリンクさせるような手だてはできないのかなという、ちょっと2つほど意見を述べさせていただきました。

松元参事

島大や松江高専の話があって、入った一歩先のという話がありました。おっしゃるとおりじゃないかと思っています。

例えばパワーアップ教室というのは、島根大学それから松江高専にも来ていただいていますけども、微々たる取組ではあるのですが、その講座の中で、今例えば大学生、松江高専の子が大体何を学んでいるかというところ、それからこの学びが中学校とか小学校で

はどういう力をつけていかなきゃいけないかというのを、具体的に行っている学生から語る場っていうのを設けています。そういったことを通して、具体的に自分に教えてくれた学生がこんなことを学んでいて、こういう積み重ねがあればいいんだということを少しでもキャリアの育成に生かしてもらいたいというところで、短時間ではあるのですが、毎回パワーアップ教室を行うたびにやっているとところです。

それから、先ほどもう一つご指摘いただいた英語科についてなのですが、先ほど文系、理系を問わず英語科というのはかなり重要な教科というのは理解しておりますけれども、現時点での事業というところについては、例えば先ほどの高専とか島大という点につきましては、理数系人材を育てるということで、理数系の教科ということで、島根大学については特に算数、数学、松江高専に対しては理科的なものということで一旦整理して理数系を強化していくというところでやっているところです。それは、またその辺必要なものというのを明らかにしながら、先ほど申し上げた入った先の一步先っていうところを見据えて、その力をどう具体的な事業に取り組むかということところはまた検討させていただきたいと思っています。

高市教育長 先ほど市長からも益田市型中高一貫教育の目指すところっていうところのお話がありましたけれども、一つ私の中の仮説なのですが、もしかすると益田の子供たちは本当はもっと勉強が習得できていて勉強ができれば、勉強だけではないにしても、本当は希望していた進路先であったり、希望していた進路を例えば今自分の現状とのギャップがあるがために、諦めたりとか、例えば入試も一つそういうところなのですが、挑戦して落ちたっていうところはまだ努力も必要だということが大きいのですが、私は意外と、そもそももう自分には無理だと、例えばここに本当は行って勉強したいとか、こういう仕事に将来的に就きたいと思っても、自分が置かれている状況、現状とのギャップから、それに向かって努力

をしようとか、そこに向かおうとか、それに挑戦しようということ
を諦めている事例が結構多いのではないかというところが一つ仮説
としてありまして、そういう意味では、やはりそこに挑戦できるよ
うに教育をしていってあげれば、彼らはそこに挑戦ができて、より
いい、自分がここに行けばああいうこともできるかもしれない、こ
ういうこともできるかもしれないという選択肢が増えると。ただ、
現状では選択肢がもうこれしかないというのは、やはりちょっと残
念なことではないかと、教育に携わっている者として。そういう意
味で、より自分が望んだキャリアを目指せるようにしていく、それ
が恐らく子供たちの卒業の選択肢につながるのではないかというこ
ろです。

先ほど齋藤委員からもご指摘いただきましたとおり、大体日本は今
6割近くが高等教育に進むと。ただ、それがじゃあ増えているかと
いうと、実はもうほぼ横ばいになっていて、高等教育に進もうと思
っている子はもう大体今でほぼほぼ定員を十分満たしていると。も
っと言うと、大学にしてみれば、かなりの大学がもう定員すら満た
せないという状況もここで一方ある。そういう意味では、ある意味
もう十分な状況になって、高等教育を目指す子というところも一つ
大事なのですけれども、例えばじゃあ高等教育に行っている子も、
本当は諦めていたけれどもっと違うところ、そこも選べるし、もっ
と考えてもなかったところも選べるという、そういう意味では選択
肢を増やしていくということが非常に重要ではないかなというところ
です。

それと直接関係があるかどうかですけれども、先ほど大庭委員から
もご指摘がありまして、原田委員からもお話がありましたけれど
も、例えば高専の見学会、実は本当は私とか教育委員会側がその想
定をしていたのは、当然いわゆる高校段階の進学を想定している子
供たちがたくさん行って見てもらうのだらうと思っていたら、開け
たら小学生しかいませんでした。小学生が悪いわけではない。小学

生のうちからそういう進路を考えていくっていうことは重要なのですけども、例えばじゃあ協働フェスタにおいても、中学生の参加がかなり少ないという状況。算数・数学パワーアップ教室も同様に、中学生がもっと来てくれればいいのにとっても、何となく小学生よりも少ないというところ。当然その日程であったり、当然中学生段階での生活が小学校よりもちょっと違うという側面はある一方、恐らくそこだけではなく、中学生自身が自分のキャリアであったりとか学習に対する意識ということが、恐らく小学生と中学生、場合によっては小学校と中学校で学校自体が違うのかもしれない。それは、校長をはじめ、教職員のそういったところに対する意識という違いが恐らく出てきている側面があるのではないかな。ただ、そうはいっても、中学生が少ないというわけではないので、そこはいろいろ我々も原因分析をして、どういうアプローチの仕方があるのかというのは一つ探っていけないといけない部分なのかなというふうに思っております。

あとは、原田委員からも、最近私自身がもうほとんど英語を使っていないのですけれど、例えば学生のときある研究をやっていたので、もう当然英語での学会発表や海外の研究者と当然英語でコミュニケーションを図るとか、文科省にいたときには当然海外の方と一緒に仕事をするところもあるので、そういったところで使うという意味では、今の子供たちが大きくなったときには、多分我々が使っているよりも恐らくもっとニーズが高くなるということがまず想像できる。その一方で、英語教育、いわゆる学校で勉強をするという側面ではだんだん低年齢化して行って、もうついには小学校で教科として勉強もするという状況になってきた。そういった中で、やはり特に我が市で、今中高一貫教育という側面ですけれども、我々は最初の冒頭のポンチ絵のように、幼稚園段階から高校段階まで一貫して子供たちの成長を支えていこうという中で小学校と中学校の段階の接続というところで、小・中での一貫教育的なところを連携してや

っていくという側面では、英語教育というのを中軸に置いて、英語教育を核にして小学校と中学校の学習の連続、接続を図っていこうというところをやっています。なかなか教員の不足であったりとか量もあって、小学校の全ての学校に英語の専科教員が置けるというわけではないのですけれども、一方市としてはALTという海外の外国人の方にいわゆるアシスタント的に入っていただくというのがあるのですが、今4名を市内に配置をして、各小学校も中学校も英語を使って海外の方といろいろコミュニケーションを図ったり、特に小学校ですと一緒にゲームをしたりとか自己紹介のやり取りをしたりというところでのことを進めているところです。そういったところを少しずつ強化していったら、英語に対する意欲というところは、ひとつ身につけていかないといけないだろうと。あとは、特に英語を使えるようになるというのは、やっぱりツールとして使うという側面では、使う機会がないとなかなか使えるようになったり、使ってみたいという意欲が湧かないというところがあるのかなと思います。やっぱりそこは都市部のように、ちょっと行けば海外の方がそこら辺にいるっていう状況とは違うという地域の特性もあるので、そういったところを強くALTを活用したり、海外とオンラインでつないで授業をするなど、1人1台端末を整備しましたので、そういったものを活用しつつ、海外の方とコミュニケーションを図っていくというような機会もつくっているんで、そういったところを少しずつ広げながら、全体的な英語に向かう意欲というような、関心を高めていくということはすごく重要なことだろうというふうに思っています。

あとは、齋藤委員がご指摘いただきましたけれども、やはり国の調査でも、授業が分からないという回答がそれなりに高いというのが実態です。そういったところを、いわゆる市教育委員会であったり基礎自治体がどこまで教員の指導力の向上というところに力を入れていくのかっていうのは、これはなかなか難しいところがあり、な

かなか県と市という役割分担の中で、私自身は基本的には県がやっていただく部分であろうというふうには思っているものの、かといって市としての課題もあるというところです。そこにはやはり長く時間がかかっていくだろうというところです。

本日、実は午前中に、市内の校長会という校長先生が集まる会とここで意見交換をする場があったのですが、その際に私からは各学校の先生方の指導力というのを上げてもらいたいというところを学校にお願いを、以前からもしているのですが、今回も改めてさせていただいたところです。そういった取組であったりとか、市教委からのサポートも使いながら、市内の先生方お一人お一人が指導力というのを常に上げていくという環境であったりとか、そういうサポートを引き続きしていければいいなと。逆に言うと、しなければいけないのでやっていきたいというふうに考えているところです。

齋藤委員

A L T 4名の国はどこですか。

高市教育長

国は、皆さんアメリカから来ていただいています、バックグラウンドはそれぞれです。実は、今まで新型コロナウイルスの関係で海外から働きに来られる方とか、海外から国内に入る方がかなり制限をされていて、任期を終えて帰られた方の補充というか、次の方はもう決まっているのですが、実際来日できないというのでずっと止まっていたというのがしばらく続いていたのですが、やっと今回4名そろそろという形でやっているということで、徐々に徐々にそういったところも普段に戻ってきたり、来られている方皆さんバックグラウンドがばらばらですので、そういう意味ではいろんな方に会うとか、いろんな考え方、背景の方と会うという機会には十分になっているのかなと思っています。

大庭委員

1つ気になったところが、お願いできたらというところがあるので、益田市型中高一貫教育に係る取組についてという最後の資料ですが、その新規の中高連携学力育成推進事業費（新

規)とありますけども、ここのところで、その下の市内高校のところで、中高を連携した学力育成に取り組むことにより、児童・生徒の学力育成を推進するとあります。なぜここに児童が入るのかと思うわけですね。ですから、多分この児童というのは、小学校で言えば5、6年生ぐらいと考えて対象にして想定されておりますか。

田原課長 そうですね。まだ具体的に小学生の学年までを今の時点で定めているわけではないのですけども、一定程度学年を小学生については絞る必要があるのかなとは思っています。

大庭委員 そうすると、多分もう近い将来中学校に入学するであろうそういう小学生を対象にするということになれば、やっぱり言葉を少し付け足して、中高連携で取り組んでいるのだけでも、直近の中学生と関わる連続性の部分では非常に強いつながりが考えられる小学校高学年も巻き込んでとか何か、そんな言葉をまた考えてもらえたらと思うのですけども、そういう言葉を入れるとすんなりぱっとこの説明が頭に入ってくるんですよ。言葉を少し足していただくと、児童をどう関わらせて捉えるかという部分でこちらも納得がいきますので、少し言葉を付け加えていただけたら大変ありがたいと思います。

山本市長 貴重なご意見ありがとうございます。確かに中高となると、これは生徒となりますので、児童という言葉は小学校までじゃないかということになりますので。ここを補足的に資料も大分できつつありますので、これから可變的なものについてはなるべくその辺すんなりと理解いただけるような文言に加筆していきたいと思います。

原田委員 一つの案なのですが、ちょっと突拍子もない案で終わるのですけれども、子供たちの勉強したい、自分もできるんだっていう意欲を育てることが大事っておっしゃって、本当にそのとおりで思うんです。幾ら環境を整えたところで、その子がやろうっていう気持ちにならないとなかなか学力の向上にはつながらないので、ではその気持ちがどこから湧いてくるのかって、やっぱり先生の資質ってい

うのがすごく大きくて、どんな先生に出会ってどんなことを教えてもらうかという部分が大きいかと思うのですが、先生はやっぱり異動もありますし、急に先生のレベルアップというのなかなか時間がかかることだと思うので、例えばカリスマと呼ばれる大手予備校の方と連携して、その面白さを伝えてくれる先生の授業を受ける機会を提供するとか、それによって学校の先生たちも刺激になって、自分たちもやろうっていう気になるのではないかなというところもありますし、今いろんな学力テストを学校で受ける機会がありますが、日本全国の中で今自分がどれくらいの位置にいるのかって知るすべがないんです。小学生の間とか、中学生もそうだと思うのですが。そういう機会も、例えば大手予備校と連携して知る機会があってもいいのかなと。自分は今ここにいるんだ、じゃあ東大に行きたいのだったらまだもうちょっと頑張らないといけないという客観的に見える機会を子供たちに提供していただければ、親としてもそれが把握できてありがたいなと感じます。

松元参事

今ご指摘いただいた、例えばカリスマ講師、いわゆる指導力のある教師、授業力のある教師を招聘して子供さんが授業を受けるというのは教職員がレベルアップする大事な要素だと思います。直接今、今回はこの事業でやってはいないのですが、例えば国語科だったり、算数、数学だったりというところで、例えば著名といいますか県の附属小、附属中と呼ばれるところから講師をお呼びして、その授業を受けてもらうという取組を実はやっていたこともありました。ですが、それが継続しないというところの課題もあるのですが、そういったことも含めて我々自身も、子供自身も学ぶ機会をつくるっていうのは非常に大事な要素だと思いますので、ご指摘いただいたことも含め、この事業を今どこまでできるかというところがありますけども、検討させていただきたいと思いました。

それから、自分のレベルを知ることです。自分はどのような順位というか、立ち位置にいるのかというところは、おっしゃったように

よく言われるのが、小・中学生までそういったものがなく、突然大学受験になって自分の立ち位置がはっきり分かると。そこで全国的な競争に巻き込まれるというよく指摘を受けます。実は、内部でそういったことが必要でないかと議論したかったのですが、なかなかそこについて、子供たちが例えば自分が全国的にまた県で何位というまでなかなかそれは環境が整ってないというのが現実です。ですが、先ほどの数学、算数に限って言うと、例えば実は公的なものと言うと、島根県の数リンピックというのを毎年やっています。その数リンピックというのは、小学校5年生から中学生まで参加できますけども、自分が算数、数学を受けたときに、順位は出ませんが、実際金メダル、銀メダル、銅メダルということで、結果的に1位、2位、3位なんですけども、そういったことが個人レベルで、また県レベルで分かるという取組が実はあります。そういった工夫によってはできるのではないかと思いますので、また今後参考にさせていただきたいと思います。

田原課長

すいません。私からちょっと補足をさせていただきますと、先ほどのお話にありました子供さんの学習意欲を向上させる仕掛けなり、取組ということで、来年度の新規事業の中高連携学力育成推進事業の中で、先ほどのお話がありましたが、カリスマ教師的な方をお呼びしてぜひ学習する楽しさというところを伝えていただけるような、そういった取組も来年度の授業の中で実施していきたいなと思っています。ただ、あとどういった方々が予算的な問題もあるのですけども、その辺はこれから具体的に内容につきましては詰めていくという状況ではありますけども、そういった視点でやっていきたいと思っています。

大庭委員

以前益田市の校長会で、私も個人的に筑波大学附属小学校の月刊誌を取っておりまして、そういったものを取っていると、例えば1人とか2人とかを無料で益田市に招聘することができるんです。そうして、広く益田市内の先生方に授業を見ていただくということ

で、ちょうど現職のときにそれが何年かずっと続いておりまして、そういったいわゆる名人と言われる先生に授業をしていただくという機会を設けてきております。今はもうそれはないですね。

松元参事

実は、数年前までそれは毎年やっておりました。あとは、その月刊誌について、その注文する仕組みはまだあるのですが、コロナ禍によって校舎になかなか行きにくいというところでしていなかった。今後の状況によっては復活しやすくなるのではないかとは思っています。

大庭委員

本当にいい授業を見せていただけます。わざわざ筑波大附属小にもう本当に余地がないぐらい教室に全国の先生方が行ってみるわけなのですけども、わざわざ飛行機代を使っていかなくても向こうから来てくれるんです。それを見ることができるとするのは非常にいいので、また今後そういったこともぜひ、原田委員さんもおっしゃったように、ひとつよろしくをお願いします。

齋藤委員

今までいろいろ話し合ってきた内容の中で1つ大事なことは、学校が一生懸命になっても親御さんの理解が得られないと、これ子供って参加しないんですよね。ですから、そのところをいかにうまくコンセンサスが取れるかどうか、先生方と親御さんとの、なかなか先生方は忙し過ぎて時間を取りにくいとは思いますが、そこをどうしていったらいいのかというのが大きな課題だろうと思うんです。

それで、もう一つは、今益田市の子供たちを調査したときに保護者の方も調査をしているのですが、そのときに保護者の方の93%が学校の教育方針を伝えてほしいという回答が出てきているんです。

それからあとは、もっと保護者が学校に気軽に相談ができる雰囲気をつくってほしい、これが92%あったんです。そういう意味では、親御さんも希望しているわけですから、そこへ先生方がいかにコンタクトできるかという雰囲気づくりをやると、その理解がある

と子供さん方も参加して来やすくなりますし、親の責任において、親の考え方を先生方に理解してもらえるし、お互いに先生方の考えを親御さんに理解してもらえる。全部一朝一夕にはいきませんが、少しそういう雰囲気をつくっていくっていうのもとても大事な視点ではないかなというふうに思います。

山本市長 そうですね、今のそういった視点も含めて、今後やるとよいですね。

長嶺部長 議論が尽きないということがよく分かりました。ありがとうございました。とはいえ、今日は限られた時間ということで、またこの後、その他の報告もありますので。

今日はいろんな意見をいただきました。確かにそうだというような部分もありました。これを一遍にできれば一番いいのですが、なかなか一遍には振り切れないようなこともあるのかと思いますので、各学校いろいろ参加者が問題になったり、今年初めて取り組んだ部分も来年継続してやるのですが、今までと同じでいいわけがないということは今日完全に皆さんの意見が一致した。もっとこうすべきだろう、ああすべきだろうという部分もありました。ここは、それぞれの学校に我々もきちんと向き合って、高等学校、そちらと話をしながらこんなふうに考えていきたいというようなこともいろいろ議論をしていきたいというふうに思っています。

それから、4校の連携で未来協働フェスタをやらせていただきました。これは、来年も引き続いてやるということで、4つの高校がきちんと連携をしてやっていただきたいという話もしていこうと思っています。

そして、新たに高度理数系人材は当然のこととしてお話をしてくるので、もっと充実を図ろうと思います。

そして、新たに中高連携の学力育成という部分、業務委託という中で各学校いろんなことを考えられると思います。学校の意見を聞きながら、どこかの学校といろんな連携をしながら取り組んでいくた

と思います。その中で、言われたように、勉強するって楽しいぞっていうようなことをやっていただくような機会も設けられればというふうに思いますし、参加して子供たちの保護者さんもいろんなことをその場で言っていたらということもできたらと思います。

こういった3つの柱を益田市型の中高一貫教育と位置づけて、中学校卒業後、それから高等学校卒業後、それと大学という高等教育科へ行った後の卒業後という選択肢をいろいろきちんと自分で見つけていけるようにというような形で、可能性を広げてあげられるような教育というのを進めていけるかというふうに思います。そういったところは、皆さんある程度考え方が、全てできるかどうかは別にしようとは思いますが、いろんな意見が一致できたのではないかなというふうに今日のところでは思っております。

また、来年はその様子も見ていただいたりして、もっとああだろう、こうだろうというようなこともできたらと思っております。とはいえ、この新しい事業も各高校へ行って、いや、うちはできませんよとみんなに言われたら元も子もないわけで、いろんな意見を聞きながら取り組んで進めていきたいというふうに考えています。

それでは、この中高一貫に係る部分についてはここで閉じさせていただきます。

志田原課長 それでは、次第のその他のところに入りますが、先ほど中高一貫教育推進のポンチ絵の中にもありました大学キャリア教育について、せっかくの機会ですので、こういった取組をしているかというところを、委員の皆さんと共有させていただきたいなと思います。

中島主査 協働のひとづくり推進課の中島と申します。
本来ですと、課長の大畑が参りましてご説明するところですが、どうしても今日、本人でないと代えが難しいというアポイントが入りまして、欠席をさせていただいております。

説明につきましては、代わりまして中島と当課の派遣社会教育主事

の桐より説明をしてまいりたいと思っています。

なお、先ほど、子供たちの学びとか勉強に向かう姿勢という話があったかと思います。直接的に学力を上げるというところに対してのアプローチとして、カリスマ的な方にお越しいただくという提案をいただいたところですけども、我々協働のひとづくり推進課としては、子供たちの学ぶ意欲というのを高める手法の一つとしてこのライフキャリア教育に取り組んでいると認識をしております。子供たちの学ぶフィールド圏は、学校の勉強だけではなく、その周りを取り巻く全てのものが子供たちの学びの場になるだろうと思っていて、ライフキャリア教育では学校外での子供たちの学ぶ意欲を高めるということを様々な手法で実施をしてきております。この学校外で自分が好きなことということがまずきっかけかなと思っていますけども、そこで学ぶということの意欲を高めた子供たちが、学校に戻っても、学校の先生とも協力しながら、学校の学びということに対しても意欲を上げていく。その上がった意欲をまた学校外で発表するという、学校の学びと学校外の学びの交換と私は言っているのですけども、これをつなげていくことで子供たちの学ぶ意欲というのを底上げしていきたいと考えて取り組んできております。

今日は、そのライフキャリア教育プログラムにつきまして、今年度こんなことをやりましたよということと、これまでの実績につきまして、担当しております派遣社会教育主事の桐により説明をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

桐社会教育主事

それでは、失礼します。協働のひとづくり推進課で派遣社会教育主事をしています桐と申します。

皆様のお手元に、令和4年度のライフキャリア教育の進捗という1枚紙があると思います。そちらで簡単に説明をさせていただきたいと思います。

先ほど中島もお伝えしましたが、学校任せとか親任せではなくて、益田市全体で子供たちを支えて育てていこう、そういうコンセ

プトの下、やはり子供たちは学校と家との往復でしかないのです、出会う大人というのは結局教員と保護者という関係の中で長い間過ごすことになります。そうではなくて、益田では本当にいろんな多様なすばらしい大人がたくさんおられるのに、それを知らないまま益田を出ていってしまっている現状もあるというところから、ライフキャリア教育をスタートしている事実もあります。

1 番目の益田版カタリ場ですが、これは原田委員さんにもご参加をいただきましたけども、益田市内、また益田養護学校以外の小・中・高全ての学校で実施をされています。小学校につきましては、7校が今月中に全て終わる予定になっていますが、それぞれ進んでおります。高校、中学校は地域の大人との対話の時間、小学校につきましては、進学先が決まった高校3年生を中心に、この高校生たちが小学生にカタリ場をするというプログラムになっております。これ高校生が小学生に語るというそのプログラム自体が、小学生にとったら、ああ、こういう高校生たちになれるんだ、なりたいなというロールモデルを生んでいる事例になっておりますし、ここに参加をしていただく地域の大人の方も、例えばI ターンの人がこの場所に参加をされて、益田の人ってこんなにたくさんいろんなことができるんだったら、自分も何かやってみたいといって地域の活動に参加された事例もあります。今、それが延べ人数で言うと参加生徒数が630人、参加キャスト数が249人と、もうかれこれ何年もやっていますが、もう延べ人数でいくと益田の人口の10%の人、地域の大人が参加をしているということになっております。

2 番目のミライツクルプログラムというのが、これは大人のやりたい場、大人のやりたいを大事にして、その大人のやりたいを中高生、主に高校生の子を体験させるというワークショップになっています。なので、本当に大人がやりたいこと、例えば若手の社会人1年、2年目の子が、自分は料理が好きだからとプリンとかを作る講座を高校生に教えたいんだというところで、高校生がそこに参加を

して、こうやって地域の中で自分たちのやりたいことができる町なんだなというのを中高生も感じますし、一つの事例としては、翔陽高校の生徒さんが授業の中で保護動物の探求をしているときにそのミライツクルプログラムで大人の達人と呼ばれる方がその保護動物のスペシャリストの方で、その企画をきっかけにその翔陽高校生は専門学校をそういう保護動物を学べる学校に進学して、その進学した大学生がまたこのミライツクルプログラムに達人として戻ってくるという循環が生まれてきている、そういった事例もあります。

3番の第3の居場所、サードプレイスのところですが、一般社団法人豊かな暮らしラボラトリーというところに委託を出しておりまして、このユタラボというところに今2,454名、延べ人数ですけども第3の居場所としています。

ここで原田委員さんが先ほど言われましたけど、自習ができるスペースであったり、何か自習とかをするわけでもないけど、行ったら心が落ち着くとか、ユタラボの若い、ようはIターンの職員と話をしながらこういう生き方もあるんだなというところを話しながら味わうことができるスペースになっておりますし、今年度から高津地区の連理松センターというところを間借りしまして、こちらでも第3の居場所として、特に翔陽高校生をターゲットにしながら誰でも来られる場所づくりに努めています。このような人数とイベントの数で今実施をしております。

最後の新職場体験ですが、これは従来の、昔で言う本当に単純に職業を体験させるという活動ではなくて、新がついているのは意味がありまして、働くだけではなくて、そこで働いている人との対話を通して、中学生にとってはただ職業だけを体験するのではなくて、こういう大人もいるんだとか、こういう働きがいがあるんだとか、やりがいがあるんだなというのを対話を通して学ぶプログラムになっております。これをするに際しては、もう職場の方にも事前研修をお願いして、夜の時間に集まっていたり、もちろん中

学生には事前に面接等をしながら、新職場体験に臨む風土を養って実際に取り組んでいただいています。本年度、コロナの関係もいろいろありまして、実際に参加希望をされる事業所数は延べで280社あるのですが、コロナの関係で今年度135事業所の方々の協力を得て全ての中学校で実施を終えています。これも、数年前ですが、この新職場体験に来た生徒が実際に就職をしたというケースも既に発生したり、あと新職場体験で参加した業種を自分の進路にして農林大学校に進学するケースもあったりして、事業所にとってもただ単に中学生を受け入れないというのではなく、自分たちも自分たちの事業所の魅力やコンサルティング、プロモーションというか、PRも兼ねて前向きに参加をしていただける事業所も増えております。

あと、今いろんな1から4つの事業のほうをお伝えさせていただいたのですが、それこそこの体験を受けてきた子がどんどん循環していく、還流していくというところが今いろんなところでの事例が挙がっていきまして、それこそ今、大畑課長が別の公務とお伝えしましたが、県政番組の取材に対応しております。島根県もこの還流のモデルとして益田市に注目していただいております。それこそ今日はノンスタイルの井上さんが来られて、何とあの澄川小で取材をしているというところです。BSS系列で放送されると思いますので、また機会がありましたらぜひご覧ください。

原田委員 カタリ場についてですけど、これまでずっと人生グラフを書いてお互い発表するという形でしたけど、その形というのは今年度も同じような形で進められていく予定でしょうか。

桐社会教育主事 はい、人生グラフというものを一つのツールとして使わせていただいています。

齋藤委員 この事業に参加した中高生が益田に就職したっていう事例の数字は持っていらっしゃる。

桐社会教育主事 細かい数字ということですよ。

齋藤委員 いや、益田に残って就職をしてという子供たちがどの程度いるのでしょうか。

桐社会教育主事 知っている情報としては、先ほどお伝えしたように、今の1社の例しか持ってないのですけども、それはもう追跡していく必要はあると思っているところです。

齋藤委員 そうですね。子供の感想文で益田市にはこんな格好いいところがあったんだと答えてくれているから、それが第3には行かないにしても、進学してまた戻ってきてというようなことがあると少し力強くなりますよね、事業者としてはね。ぜひつかまえてください。

梅津委員 ユタラボで、今原田委員さんが言われるような学習ができるスペースがあるわけですが、高津地区の連理松センターのところでもそういうスペースがあるということですか。

桐社会教育主事 はい、同じように。

梅津委員 その高津地区っていうのは、地区は別に関係なくどなたでもということですか。それとも、高津地区に限るとかあるのですか。

桐社会教育主事 メインのターゲットとしては翔陽の高校生をメインにはしているのですけど、地区は関係なくユタラボと同じようにです。

梅津委員 分かりました。ありがとうございました。

高市教育長 やはり移動が大変だったりするので、こちらのほうは、益高であったりとか、明誠とか東高は近いのですけれども、どうしても翔陽だけがちょっと離れているというところで、彼らがアクセスしやすい場所にもやはり必要であろうということで設置しているということです。

梅津委員 分かりました。

桐社会教育主事 追加で申し訳ありませんが、皆さんのお手元にカラーのチラシが入っていると思います。3月4日にひとが育つまち益田フォーラムということで、今まで益田市がライフキャリア教育も含めまして人づくりを進めてまいりました。子供を中心に据えていろんな活動大切にやってきて、その関わった大人たちも変わってきて、要は

主体的なまちづくりの主体者が生まれていると。それが人づくりに
おいても、まちづくりにおいても、持続可能であるのではないかと
いうところを今回のテーマとして実施する予定にしております。現
段階では、北は北海道から南は熊本まで、全国から約50名以上の
参加者が予定をしており、市内の参加者は今80名程度おります。
今後また増えていくと思いますが、そうやって全国から注目されて
きているというところが少なからずありまして、この場をそれこそ
ちょうど益田市が取り組んできた人づくりのいい宣伝の場所として
活用できたらなと思います。また委員の皆さんももしご都合がつけ
ば、ご参加いただけたら幸いです。

志田原課長

ぜひともご都合がつかれる委員さんがおられましたら、ぜひ出席の
ほうをお願いいたします。一応2月末までに聞いておきたいと思い
ます。

それでは、限られた時間ではございましたが、活発な意見等をいた
だきました。本日は大変ありがとうございました。

以上をもちまして令和5年度の総合教育会議を終了させていただきます。
ありがとうございます。

＝ 終了時間 16時43分 ＝